

2023年度  
入学試験問題 (1期)

国語

2023年2月2日(木)

解答を始める前に次の注意事項を十分に読みなさい。

受験上の注意事項

1. 受験票と筆記用具以外は机の上に置いてはいけません。
2. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。
3. 不正行為と認められた場合には退席を命じることがあります。
4. 「開始」の合図で、問題用紙・解答用紙を点検し、解答用紙の受験番号・氏名欄に受験番号・氏名をはっきり書いてください。
5. 問題に関する質問は不明瞭な文字等の確認以外は応じません。
6. 問題冊子の余白部分や白紙のページは、自由に使用してかまいません。
7. 試験終了時まで退席することはできません。試験終了の合図と同時に、監督者の指示にしたがって解答用紙を通路側に置いてください。
8. 身体の具合が悪くなったときは、手を挙げて監督者に申し出てください。
9. 携帯電話を持っている人は電源を切ってください。これを時計として使用することはできません。
10. 問題冊子は持ち帰ってかまいません。

次の文章Aと文章Bに関する設問に答えたのち、文章Aと文章Bを関連づけて考察する設問に答えなさい（作問の都合上、一部表記を改めた所がある）。

## 文章A

生きものはずっと繁栄しつづけてきたように思うかもしれませんが、実は何度でもゼツメツに近い危機を乗り越えてきています。およそ5億年前に生きものが上陸してから、少なくとも五回、七十〜九十%の種が消えるという体験をしています。

宇宙の始まりからこれまで、時間をかけてできあがってきた自然界は生きもののおかげだと思いませんか。この考え方を「生命論的世界観」と言います。三百年の間、科学は「機械論的世界観」で進められてきましたが、どうも「生命論的世界観」の方が実態に合っていると考えられるようになってきたのです。

「人間は生きものであり、自然の一部である」というあたりまえのことが「生命論的世界観」のいちばん大切な部分です。これからの科学は、「生命論的世界観」がベースになります。

私は日常生活でも「生命論的世界観」が大事だと思っています。東日本大震災後の政治家、学者、評論家の発言より、農業、漁業、林業など第一次産業に従事して、常に自然を相手に生きてきた人々の言葉がとても魅力的でした。

例えば「津波で田んぼも畑もダメになったし、家もなくなりました。」【A】、「私はこれからここでもう一度ものをつくっていく」「技術と知恵」は持っている。それは誰にも流せなかった」と言っていた農家の人がいました。とても【B】な発言でしたが、これは「人間は自然の一部である」と理解している人の強さなのだと思います。

「人間が自然の一部」というのは当たり前前のことです。けれど、「機械論的世界観」に基づいてつくり上げてきた科学技術中心の社会は、お金や利便性のみを追求してきたせいで、自然との向き合い方を忘れてしまった。行き詰まりつつあるこの社会をつくり変えるためにも、「人間は生きものであり、自然の一部である」ということを、すべての起点として考えることが重要です。

ここからは「生命論的世界観」に基づいて私たちが生命誌研究館で取り組んでいる具体的な研究内容をお話しします。

皆さんもご存じのように、CO<sub>2</sub>を吸収して酸素をキョウキュウする熱帯雨林は私たちにとってとても大切な存在です。その熱帯雨林の「キープラント」の研究を紹介します。

キープラント、つまり熱帯雨林でもっとも大事なものはいつも実がなっている木です。実は虫や鳥、動物たちが食べますね。森にとつては彼らの存在が重要です。森は木だけでは成り立ちません。カギになる木とはイチジクです。私たちが食べているイチジクは品種改良を重ねているので、姿かたちは異なりますけれど、

野生のイチジクには、体長1.5〜2ミリの程度のイチジクコバチ（以下コバチ）という小さなハチが共生しています。

イチジクの実のように見えるのは花（花のう）です。イチジクの花のうは実のように閉じているので、受精に必要なおしべもめしべも外側からは見えません。花粉を運んで受精させるのは、ふつうはチョウやハチの役目ですが、イチジクの場合はコバチがその役目を担っています。

コバチはイチジクの花のうの先端に空いている小さな穴から入り込み、卵を産みつけます。卵から生まれた幼虫は子房（めしべの一部分）を食べて成長して、成虫になるとオスとメスは交尾をします。オスはイチジクの花のうを内側から食い破って、大きな穴を開けます。翅のないオスはそのまま死んでしまいます。花のうのなかだけでオスは生まれてそのまま死んでいくというわけです。ちょっとかわいそうですね。

一方メスはイチジクの花粉を抱えて、外界へ飛び立ちます。そしてイチジクの花のうを見つけて先端の穴から入り込み、卵を産みつける……というサイクルを繰り返します。コバチは自分の子孫がどんどん増えていき、イチジクも花粉を運んでもらえるので次々と花が咲く。これを「相利共生」といいますが、イチジクとコバチの間にはこうした関係ができあがっています。

私たちはイチジクとコバチの興味深い関係を、DNA解析でたどり着きました。

まずイチジクのなかから十一種類を選び、DNAを分析します。そしてよく似ている種類を兄弟と位置づけ、少し異なる種類はいとこと見立てて、家系図をつくりました。すると、イチジクは八千万年くらい前には一種類でしたが、ジヨジョに種類が増えていったことがわかりました。

次に、十一種類のイチジクに共生しているコバチのDNAを解析しました。そしてイチジクと同じように、DNAの差によって兄弟といとこと見立てたところ、なんとコバチもイチジクとまったく同じ関係だったのです。イチジク同士が兄弟なら共生しているコバチ同士も兄弟、イチジクがいとこの関係ならコバチもいとこでした。

③イチジクとコバチは一種対一種で、それぞれが助け合いながら互いに進化を遂げてきたことがわかったのです。これを共進化と呼びます。熱帯雨林のキープラントであるイチジクの繁栄を支えていたのはコバチでした。考え方によっては、体長わずか二ミリの程度の小さなハチが、地球上の熱帯雨林をつくっているとも言えるのです。

人間は「植林をしましょう」と言って「五万本も木を植えた」と大騒ぎしますが、森をつくりだす力という点では人間よりもコバチの方が数段上です。

昆虫と木の関係をつぶさに見ていくと、イチジクとコバチのような関係はほかにもたくさんあります。先ほど「生きものは数

千万種いる」と言いましたが、そのうちの七十五%は昆虫です。つまり、地球上の自然の多様性をつくり上げてきているのは、昆虫であり、それが植物と共同でみごと自然をつくり上げていていると考えることができます。虫けらという見方が間違っていることがわかりますね。

(中村桂子 「私のなかにある38億年の歴史」『科学は未来をひらく』筑摩書房より)

(注1) 生命誌研究館：大阪府高槻市にある生命科学に関連した展示と研究を行っている博物館

〔設問〕 次の設問に答えなさい。

問1 波線部 a～e で、「カタカナ」は漢字に、漢字は読みを「ひらがな」で答えなさい。

問2 筆者の言う①「生命論的世界観」とは何か、その説明として適当でないものを次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 「人間は生きものであり、自然の一部である」ということ。
- イ 時間をかけてできあがってきた自然界は生きもののようだととらえること。
- ウ 生命は貴重であり、何ものにも代えがたいということ。
- エ イチジクとコバチの関係のように、互いの命が影響し合って存在するという考え方。

問3 【A】に入る適語を記号で選びなさい。

- ア けれど      イ もちろん      ウ だから      エ 思った通り

問4 【B】に入る適語を記号で選びなさい。

- ア 好意的      イ 平衡的      ウ 対称的      エ 印象的

問5 筆者は、②科学技術中心の社会をどのような社会ととらえているか、五十文字以内で答えなさい。

問6 ③イチジクとコバチは一種対一種で、それぞれが助け合いながら互いに進化を遂げてきたことがわかったとあるが、その

ことがわかった根拠として適切なものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア コバチとイチジクが共生していること。
- イ イチジクとコバチのDNA解析で、遺伝子が関係しあっていること。
- ウ 十一種類のコバチのDNAを解析した結果、コバチもイチジクと全く同じ関係だったこと。
- エ コバチとイチジクが「相利共生」の関係にあること。

### 文章B

ルドルフ・シェーンハイマーの存在は、生物学の世界では完全に忘れ去られてしまっている。シェーンハイマーの発見と同様に、DNAが遺伝物質の担い手であるという、分子生物学の幕開けとなった発見に注目が集まっていた。彼の研究は、その陰にカクれてしまったのだ。しかし私は、彼の業績こそが二十世紀最高の発見だったと言えると思う。それは、ノーベル賞のような栄誉を受けたということではない。当時の生命の考え方に革命をもたらしたからだ。

シェーンハイマーは、何を発見したのだろうか。当時の生命観は、ある種の機械論的な見方が主流だった。生命現象は非常にセイミヨウで神秘的に見えるが、結局生命とは、ミクロな部品が寄り集まった機械仕掛けなのだ、多くの科学者は考えるようになっていた。

例えば、なぜ生物はものを食べねばならないか。機械論的に説明するなら「生命体は自動車と同じだから」となる。自動車は、エネルギー源であるガソリンでエンジンを回すことで走り、燃えかすは排気ガスとして捨てる。体も同じように、食べ物をエネルギー源として体の中で燃焼させて、力や熱を生み出し、燃えかすは二酸化炭素や排泄物として外に出される。生命はエネルギーを生み出す仕組みを持った機械である、と捉えられていた。

シェーンハイマーは、「生きている」とはどういうことなのかをミクロのレベルで確かめるべく、実験を進めていた。本当に食べ物が体の中で燃焼されているのかを、調べようとしたのだ。

生物の体は細胞から成り立っていて、細胞はタンパク質などの分子からできている。さらに分子は、炭素や水素、窒素といった元素でできている。だから生物の体は、ミクロのレベルでは粒子の集まりだと見なすことができる。食べ物も、野菜にしろ肉にしろ、もともとは他の生物の体の一部だから、これもまた粒子の塊だ。当時の機械論的生命観によれば、食べ物にはエネルギー

源で、燃やされる代わりにエネルギーが得られる。だからネズミが食べたエサは体内ですぐに燃焼されようと考えられた。エサの粒子が体内に入ると体の粒子とマじって見分けがつかなくなってしまうが、ちょうどその頃、原子をその同位体（アイソトープ）でマーキングするという技術が開発されていた。エサの粒子に消えないマーカーペンで色づけするようなもの、と考えばよい。マーキングしても味や匂いや栄養価は変わらず、ネズミも区別できない。だから、エサの粒子が体のどこへどう行くのか、追跡することができるというわけだ。シエンハイマーはこれを用いた。

【C】、結果はどうなったか。【D】、エサの半分以上の粒子はすぐに燃やされることなく、しつぽから骨まであらゆるところに入りこみ、そのまま体の一部になってしまったのだ。また、新しい粒子が加わったのだから体重が増えたと考えるのが自然だが、エサを食べたネズミの体重は元の体重から少しも変わらなかった。

ネズミは確かにエサを食べ、その粒子は体の一部になった。しかしネズミの体重は増えたわけではない。実験の結果から、シエンハイマーは、もともとネズミの体を構成していた粒子がエサの粒子に置き換わって、体の外へ出て行った、と考えた。今では、シエンハイマーの考えが正しいとわかっている。皆さんの実感として、爪や髪の毛はどんどん伸びていくから理解できるだろう。実は、歯や骨のような硬いものも、実感はできないが中身は入れ替わっている。心臓や脳といった、一生の間分裂しと言われている細胞も、その中身はどんどん新しくなっている。血液の細胞も、2〜3カ月ですべて入れ替わる。特に速いのは口や消化管の細胞で、2〜3日ですっかり新しい物質に置き換わっている。体のあらゆる部分は、日々変化し更新されている。そしてそれは、とりもなおさず食べ物を構成していた粒子から成り立っている。体をつくっているありとあらゆる粒子は、食べ物の粒子と、常に、しかもものすごい速度で入れ替わっているのだ。

だから、半年ぶりに会った人に「やあやあこんにちは、久しぶりです。全然お変わりありませんね」などとあいさつするけれど、実は物質のレベルで見ると、今の私たちは半年前の私たちとは同一ではなく、違う粒子に置き換わっている。「まったくお変わりありまくり」なのだ。

【E】、それでもネズミはネズミ、私は私という生物としての同一性が失われはしないことだ。これが実は、生命現象の最も大事な性質である。

シエンハイマーの行った実験は、いわば川にインクを流したようなものだ。川がある、とふだん私たちは言うが、川の実体があるわけではないし、同じ水は二度とは流れない。インクを流して初めて水の流れが目に見えるようになる。生命も同じことだ。彼は粒子に印をつけて、ネズミの体には絶えず元素が流れていることを確かめた。そして、ネズミのかたちをしたものは確

かにそこにあるが、それは物質の流れに過ぎないことを発見する。生命とは常にダイナミックに流れているもので、機械と見なすことはできない、と彼は主張した。

生命は、絶え間なく少しづつ入れ替わりながら、しかし全体としては統一を保っている。シエンハイマーは、これが「生きている」ことの最も大切な側面だ、と考えた。彼の言葉によれば、生命とは「dynamic state」にある、ということ。私はこれに「動的平衡」という訳を当てた。絶え間なく動き、少しづつ入れ替わり変化し、しかも平衡状態、つまりバランスが保たれている。この状態にあるのが、生命というものだ。

（福岡伸一「生命を考えるキーワードそれは『動的平衡』」『科学は未来をひらく』筑摩書房より）

〔設問〕 次の設問に答えなさい。

問7 波線部 f 〳 j で、「カタカナ」は漢字に、漢字は読みを「ひらがな」で答えなさい。

問8 ④彼の業績とあるが、それは何か。その説明として適当でないものを次のア〜エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 粒子に印をつけて、ネズミの体には絶えず元素が流れていたことを確かめたこと。
- イ ネズミの形は確かにあるが、それは物質の流れに過ぎないことを発見したこと。
- ウ ネズミが食べたエサは体内ですぐに燃焼されるだろうと考えたこと。
- エ エサの粒子が体のどこへどう行くのかを追跡し、一部はそのまま体の一部になることを発見したこと。

問9 【C】に入る適語を記号で選びなさい。

- ア 言うまでもなく
- イ だから
- ウ しかし
- エ さて

問10 【D】に入る適語を記号で選びなさい。

- ア 予想に反して
- イ もちろん
- ウ 断言すれば
- エ 推論すれば

問11 【E】に入る適語を記号で選びなさい。

- A 不思議なのは      I 結果論だが      ウ 背理法では      E 相対的に

問12 ⑤「生きている」ことの最も大切な側面とあるが、それは何をさすか、適切なものを次のA～Eの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- A 機械のように統一を保ちしかも入れ替わり変化すること。  
I 絶え間なく動き、少しずつ入れ替わり変化し、しかも平衡状態が保たれていること。  
ウ 生命とはミクロな部品が寄り集まった機械仕掛けであるということ。  
E 食べ物をエネルギー源として燃焼させ、力や熱を生み出すこと。

問13 文章Aと文章Bにおける共通した論旨を書きなさい。また、その論旨について、自分の考えを書きなさい。二段落構成とすること。一段落目に共通の論旨を書き、二段落目に自分の考えを書きなさい（この設問に関してのみ、段落始めの一文字空けを必須とする）。両方合わせて百二十字以内で書きなさい。

## 〔II〕

以下の文章を読んで、後の設問に答えなさい（作問の都合上、一部表記を改めた所がある）。

感覚としての自由は、考えることとどのような関係にあるのか。なぜ考えることで、私たちは自由を感じるのか。

ある哲学カフェを運営しているお母さんが、哲学対話を通して「物事を自分から切り離して考えられるようになった」と言っていた。そして「日常生活で負っている役割を脇に置いて私という個でいられる場」ができ、そこで「自由を体感できる」という。

ここには、思考と自由の関係が、きわめて的確かつ簡潔に言い表されている。

①になるかもしれないことを承知で、私なりにもう少し敷衍ふえんしてみよう。

哲学対話で私たちは自ら問い、考え、語り、他の人がそれを受け止め、応答する。【A】問いかけられ、さらに思考が促される。こうして私たちはお互いを鏡にして、そこから翻かえって自らを振り返る。

それは②な言葉で言えば、「相対化」とか「対象化」ということだろう。自分自身から、そして自分の置かれた状況、自分のもっている知識やものの見方から距離をとる。その時私たちは、それまでの自分自身から解放される。自分を縛っていたもの―役割、立場、境遇、常識、固定観念など―がゆるみ、身動きがとりやすくなる。

それは体の感覚としても表れる。先に述べたように、対話が哲学的になると、体が軽くなった感じ、底が抜けて宙に浮いた感じがする。その時おそらくは、自分が思い込んでいた前提条件が分かって、それが揺らぐか、取っ払われたのだ。

自分とは違う考え方、ものの見方を他の人から聞いた時、新たな視界が開けるのは、文字通り目の前の空間が広がって明るくなる開放感として表れる。今まで分かっていなかったことが分からなくなると、いわゆるモヤモヤした感覚、それこそ霧もやの中に迷い込んだ感じがする。

そうしたもろもろの感覚は、どこか似たところがある。何かから切り離された感じ。自分をつないでいたもの、自分が立っていた地盤から離れる。それは一方では、自分を縛りつけていたものからの解放感であり、他方で、自分を支えていたものを失う不安定感である。

解放感と不安定感―この両義的感覚は、まさしく③自由の感覚であろう。それはある種の高揚感と緊張感を伴っている。対話の時に経験する全身がざわつく感じ、快感と不快感が混じった、どちらとも言えない感覚はそれなのではないか。

これはさしあたり私の個人的な感覚にすぎないかもしれない。しかし私自身は、哲学対話のさいにこのような自由の感覚を経

験し、考えることで自由になれたのだという実感がある。

そして他の人の表情を見ていても、きつと同じような経験をしているのだという感触をもっている。参加者が眉間にしわを寄せて一見苦しい見えながら、深いところで満ち足りていて、楽しんでるように見える。この両義的な表情から、他の人たちも同じように自由を感じているように私には思えるのだ。

実際、前述のお母さんも言っているように、私たちは考えることを通してまさに自由を体感するのである。

自由にはもう一つの重要な点がある。それは個人と自由との関係である。私たちは、自由であることと、一人であることをしばしば結びつける。一人のほうが気ままで自由だと考えることが多い。哲学でも「他者危害の原則」、「B」「他人にとって害にならないかぎり、自由を認めるべきだ」という考え方があ

日常生活の中でも、「誰にも迷惑かけてないでしょ」と言っ

て、自分の行動の自由を正当化する人がいる。<sup>④</sup>「あなたには関係ないでしょ」というのも、口出しするな、私の勝手にさせてくれという、自分の自由を主張するためによく使われるセリフだ。

このような表現からも分かるように、個人の自由にとって他者は<sup>⑤</sup>とされることが多い。実際、個人どうしの利害や価値観、意向は一致しないのが普通であろう。ある人の自由は他の人の自由と衝突する。そこで他者との間で折り合いをつける必要が出てくる。他の人と関わることは、自由を制限するネガティブな要因となる。

「C」、自分のお金と時間を謳歌<sup>おうか</sup>するシングルをかつて「独身貴族」と呼び、逆に愛する人といっしょになって幸せなはずの結婚を「人生の墓場」と表現した。今でも、人といっしょにいるのは煩わしいと思う人はいる。一人で生きているほうが気楽だ、自由気ままでいられる。

たしかにそうだ。結婚も、人付き合いも、気をつかうだけ。相手が好きでも嫌いでも、いっしょにいたいことが疲れる—そんなふうにも思う人も多いだろう。だが本当にそうなのだろうか。本当にそれだけなのだろうか。

他者が根本的に自由の妨げなのだとすれば、他者と共に生きるのは、仕方がないからであって、できれば他の人などいないほうがいいのだろうか。だとすれば、人と関わって生きているかぎり、私たちの人生は妥協の産物でしかないだろう。

実際、他の人といっしょに譲歩したり、我慢したりしないといけないことはある。「D」<sup>⑥</sup>「他者と共についても、あるいは共にいるからこそ、自由だと感じることもあるのではないか。それに私たちは、どこかですべて自由の味<sup>あじ</sup>を覚えた後に、それが抑えられたり妨げられたりする状態として不自由さを感じるのではないか。

私たちは生まれてから（あるいは生まれる以前から）、他の人との間で、他の人といっしょに生きている。最初の自由の感覚

は、そこで身につけたはずだ。その時他者は、自由の障害ではなく、むしろ前提だったにちがいない。他者との関わりがあるからこそ、個人の自由が可能になり、そのうえで他者が時に障壁になるのではないか。

「E」、この自由の感覚は、成長するにつれて、薄まることはあっても、けっして失われることはないだろう。私たちの自由を妨げるのが他者なら、私たちが自由にしてくれるのも他者だということは、実は大人になっても変わらないはずだ。

これはたんなる理屈ではない。対話において哲学的瞬間に感じる自由は、感覚じたいが個人的であり、主観的であるとして、だからといって、他者と共有できないわけではない。そこで自分が感じる自由は、まさにその場で他の人と共に問い、考え、語り、聞くことではじめて得られるものである。だからそれは、他者と共に感じる自由なのだ。

こうして私たちは考えることで自由になり、また他の人といっしょに考えることで、お互いが自由になる—哲学対話は、このような固有の、そしておそらくは、より深いところにある自由を実感し理解する格好の機会なのである。

（梶谷真司『考えるとはどういうことか』幻冬舎より）

〔設問〕 次の設問に答えなさい。

問1 空欄【A】～【E】に入る最も適切な語を一つずつ選びなさい。なお、それぞれに異なる語が入る。

ア けれども イ だから ウ そして エ すなわち オ だとすれば

問2 空欄①に入る適語を次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 矛盾 イ 蛇足 ウ 言い訳 エ 要約

問3 空欄②に入る適語を次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 具体的 イ 結論的 ウ 論理的 エ 抽象的

問4 傍線部③「自由の感覚とはどのような感覚か、文章中から八文字でそのまま抜き出しなさい。

問5 傍線部④「あなたには関係ないでしょ」の根拠となる言葉を文章中から七文字でそのまま抜き出しなさい。

問6 空欄⑤に入る語で適切でないものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 障害      イ 異物      ウ 邪魔者      エ 身内

問7 ⑥他者と共においても、あるいは共にいるからこそ、自由だと感じるとあるが、それはどういうことか。六十文字以内で答えなさい。

国語 (1期)

解答用紙




(I)

合計 62点

問一

a	絶滅
b	供給
c	にな
d	かか
e	徐々

1 5  
0 × 2  
点

問二

ウ	問三	ア	問四	エ
---	----	---	----	---

3 9 × 3  
点

問五

お	金	利	便	性	の	み	を	追	求	し	て
た	せ	い	で	、	自	然	性	の	向	き	合
忘	れ	て	し	ま	っ	た	行	き	詰	ま	り
社	会	の	自	由	が	あ	る	か	ら	自	由
る	社	会	の	自	由	が	あ	る	か	ら	自

5 9 × 3  
点

問六

ウ
---

3  
点

問七

f	隠
---	---

5 1 × 2  
点

問八

ウ	問九	エ	問十	ア	問十一	ア	問十二	イ
---	----	---	----	---	-----	---	-----	---

5 1 × 0  
点

問十三

「	共	通	し	た	論	旨	は	『	生	命	論	的	世	界	観	』	の	方
が	『	機	械	論	的	世	界	観	』	よ	り	、	実	態	に	合	っ	て
「	と	考	え	ら	れ	る	。	「	観	の	意	見	を	書	く	。	一	段
受	け	て	の	内	容	で	あ	れ	ば	よ	い	。	5	点	。一	段	落	を

5 1 × 0  
点

問十四

ウ	問九	エ	問十	ア	問十一	ア	問十二	イ
---	----	---	----	---	-----	---	-----	---

5 1 × 3  
点

問十五

「	共	通	し	た	論	旨	は	『	生	命	論	的	世	界	観	』	の	方
が	『	機	械	論	的	世	界	観	』	よ	り	、	実	態	に	合	っ	て
「	と	考	え	ら	れ	る	。	「	観	の	意	見	を	書	く	。一	段	落
受	け	て	の	内	容	で	あ	れ	ば	よ	い	。5	点	。一	段	落	を	

5 1 × 3  
点

問十六

「	生	命	論	的	世	界	観	」	が	「	機	械	論	的	世	界	観	」		
「	と	考	え	ら	れ	る	。一	段	落	目	は	「	生	命	論	的	世	界	観	」
「	と	考	え	ら	れ	る	。一	段	落	目	は	「	生	命	論	的	世	界	観	」
「	と	考	え	ら	れ	る	。一	段	落	目	は	「	生	命	論	的	世	界	観	」

合計 10点

一段落目は「生命論的世界観」が「機械論的世界観」より優位性があるという内容であればマルで配点が5点。二段落目は、一段落を受けての意見であれば5点。合計10点。

(II)

合計 38点

問一

A	ウ	B	エ	C	イ	D	ア	E	オ
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

1 5  
5 × 3  
点

問二

イ	問三	エ	問四	解放感	と不安定感
---	----	---	----	-----	-------

3 9 × 3  
点

問五

他	者	危	害	の	原	則	問六	エ
---	---	---	---	---	---	---	----	---

2 6 × 3  
点

問七

最	初	の	自	由	の	感	覚	は	他	人	と	の	間
で	身	に	つ	け	た	は	ず	だ	。他	者	が	前	堤
だ	っ	た	。自	由	者	と	の	関	わり	が	あ	る	か
ら	個	人	の	自	由	が	可	能	に	な	る	の	だ

8  
点

「最初の自由の感覚は他人との間で身につけた。」が書いていれば(4点)  
「他者とのかわりがあるから自由が可能になる。」が書いていれば(4点)

合計 8点



2023年度入試問題（1期）国語 解答と解説

〔I〕（合計62点）

問一 a 絶滅 b 供給 c にな d かか e 徐々（徐徐も可）（5×2点＝合計10点）

問二 ウ（3点）

ウだけが「生命論的世界観」についての内容ではない。

問三 ア（3点）

つなぐ言葉の前が否定的な内容、後が肯定的にとらえる内容。逆説の関係。

問四 エ（3点）

筆者は「第一次産業の人々の言葉がとても魅力的でした。」と語っている。その人々の発言を「印象的」と感じている。

問五 お金や利便性のみを追求してきたせいで、自然との向き合い方を忘れてしまった行き詰まりつつある社会（内容が合っていれば5点）

問六 ウ（3点）

根拠として一番適切で明確なのがウ。

問七 f 隠 g 精妙 h トラ i かたまり j 混（5×2点＝合計10点）

問八 ウ（3点）

ウの「ネズミが食べたエサは体内ですぐに燃焼されるだろう」とは彼は考えていない。

問九 エ（3点）

原因結果の関係ではない。前後が逆の関係ではない。前述の事柄を受けて、あとに続けるときに用いる使い方であるので、「さて」が正解。

問十 ア（3点）

前の内容と後の内容が相反しているので、「予想に反して」が正解。

問十一 ア（3点）

予想外の内容が続くので、「不思議なのは」が正解。

問十二 イ（3点）

最も大切な側面は、「入れ替わり変化するにもかかわらず、平衡状態が保たれていること」。

問十三 「共通した論旨は『生命論的世界観』の方が『機械論的世界観』より、実態に合っていると考えられる。」である。（1段落目）5点

2段落目は、1段落目の論旨が正しい場合に、その論旨についての自分の意見が書けていればマル。5点 合計10点

〔II〕（合計38点）

問一 Aウ 順接の関係

Bエ 言い換え

Cイ 前に述べた事柄を受けて、それを理由として順当に起こる内容を導いているの

で、「だから」が正解。

Dア 前後が逆の内容。逆接。

Eオ 前の内容を前提とすればというつながりの関係なので、「だとすれば」が正解。

(5×3点⇨合計15点)

問二 イ (3点)

繰り返し返しの内容になるので、「蛇足」が正解。

問三 エ (3点)

前の内容を後で抽象化している。「抽象的」が正解。

問四 開放感と不安定感 (3点)

8文字での表現は「開放感と不安定感」しかない。

問五 他者危害の原則 (3点)

「他人にとって害にならない限りは、自由を認めるべきだ」という考え方を表現した言葉。

問六 エ (3点)

該当する言葉は「マイナス」を示す言葉。「マイナス」を示していない言葉は「身内」だけ。正解はエ身内。

問七 最初の自由の感覚は他人との間で身につけたはずだ。他者が前提だった。他者との関わりがあるから個人の自由が可能になるのだ。

「最初の自由の感覚は他人との間で身につけた。」が書いていたら4点。「他者との関わりがあるから個人の自由が可能になる。」が書いていれば4点。合計8点